

旧約聖書における救い主待望

司祭 ヨハネ 井田 泉

エリサベトが男の子を産んだとき、父ザカリアは聖霊に満たされてこう預言しました。ルカ福音書第1章にこう記されています。

「76 幼子よ、お前はいと高き方の
預言者と呼ばれる。

主に先立って行き、その道を整え、

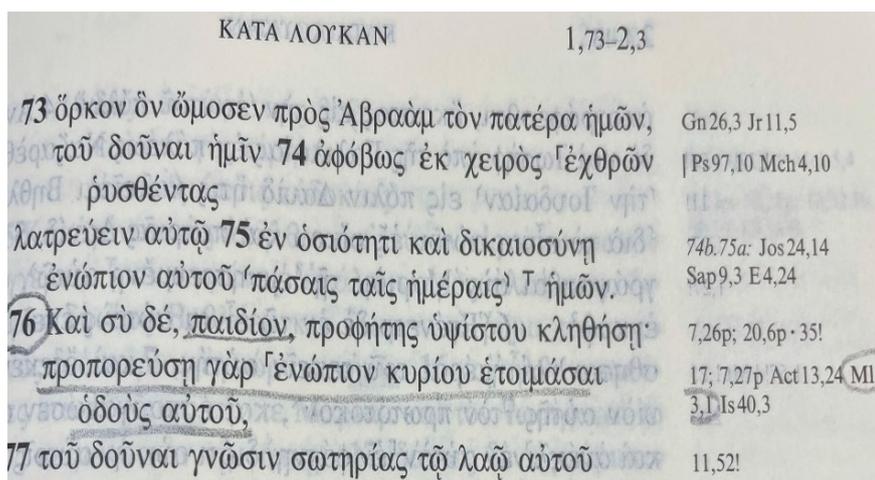
77 主の民に罪の赦しによる救いを
知らせるからである。

78 これは我らの神の憐れみの心によ
る。

この憐れみによって、

高い所からあげぼのの光が我らを訪れ、

79 暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、
我らの歩みを平和の道に導く。」



ギリシア語新約聖書 右にマラキ書の引照

この幼子とは後の洗礼者ヨハネです。「主に先立って行き、その道を整え」は旧約聖書・マラキ書の預言「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える」(3:1)。聖書協会共同訳では「私は使者を遣わす。彼は私の前に道を整える」に基づいています。マラキの預言と救い主待望は、エリサベト、ザカリア、洗礼者ヨハネをとおしてイエス・キリストにつながっています。

救い主イエス・キリストの降誕は、神の民イスラエルの長い歴史の中で預言され、待望されてきたことの実現である。旧約聖書における救い主待望に触れることをとおして、わたしたちはより深くイエス・キリストを理解することができるでしょう。

1. ベオルの子バラム

救い主をはるか遠くから仰ぎ見て待ち望んだ一人は、民数記に記されたベオルの子バラムという人です。およそ紀元前1300年前、今から3300年も前の人です。

イスラエルの人々が出エジプト後40年の旅をして、ようやく約束の地に近づいたとき、モアブの王バラクはイスラエルを恐れ、これを呪って追い出したいと願いました。そこではるか遠くのユーフラテス川のほとりに住む、バラムという人を招くことにしました。聞くところによれば、

バラムは超能力を持っており、見えないものを透視することができ、人を生かすことも滅ぼすこともできるというのです。

バラクはたくさんの贈り物を用意して使者を遣わしました。

「来て、イスラエルを呪ってほしい。」

バラムはしかし、利益のためにすぐに動くことはしないのです。彼はその夜、神に祈って問いかけました。すると神は答えられました。

「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。この民を呪ってはならない。彼らは祝福されているからだ。」民数記 22 : 13

バラムは辞退しました。するとモアブのバラク王は、もう一度、前よりも多くの、位の高い使者を遣わして言いました。

「どうかわたしのところに来るのを拒まないでください。あなたを大いに優遇します。あなたが言われることは何でもします。どうか来て、わたしのためにイスラエルの民に呪いをかけてください。」民数記 22 : 16 - 17

これはバラムにとって誘惑の危機です。求められるとおりに出かけて、本気でイスラエルを呪うか、形だけイスラエルを口で呪うか。いずれにせよバラク王の求めに応じれば、多くの富を得ることができ、自分の名声も上がるはずですが、拒否すれば、身に危険が及ぶかもしれません。

その夜、バラムが神に尋ねると、神はバラムに「一緒に行ってよい」と言われました。しかし実は、神はバラムに対して憤っておられたのです(22:22)。

バラムは翌朝起きると、ろばに鞍をつけ、モアブの使いと共に出かけました。ところが途中でろばが勝手に道をそれて畑に踏み込んだり、道の両側の石垣に身体ごと押しついたり、しまいにはバラムを乗せたままうずくまってしまうました。バラムはそのたびに鞭や杖でろばを打ちました。

そのとき、バラムの目が開かれて、自分たちの前に主の御使いが抜き身の剣を手にして道に立っているのを見たのです。



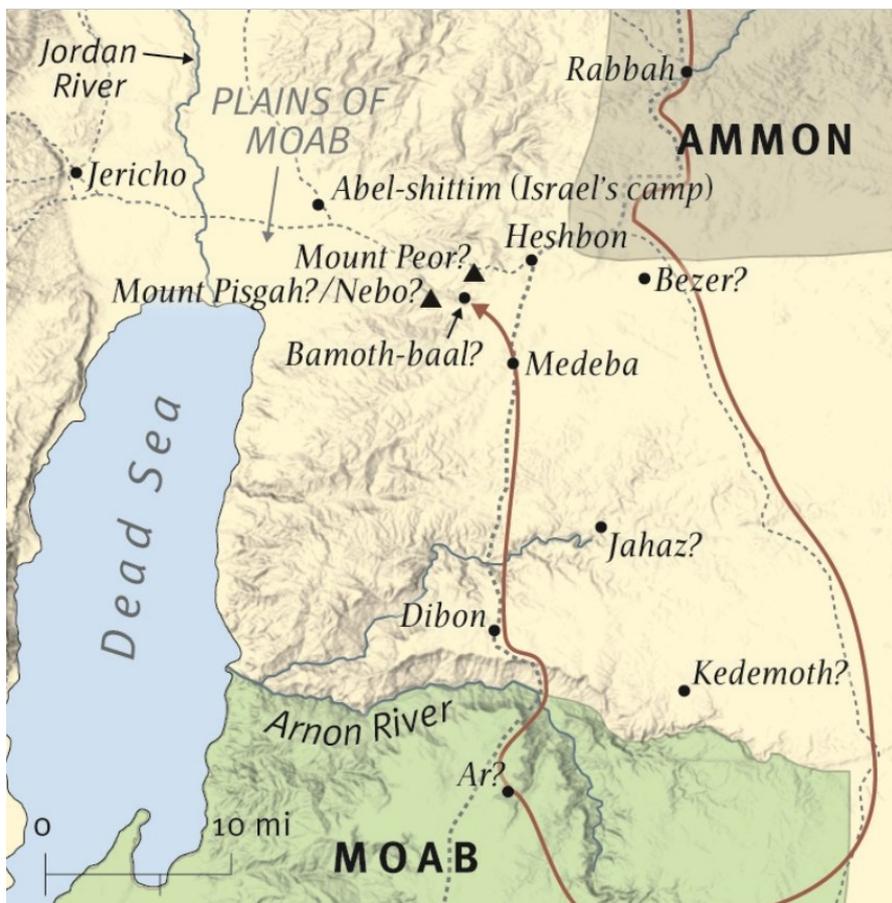
レンブラント「バラムと主の御使い」

そのときまで、バラムは、自分が自分を守ることに、富と名声を得ることに思いが傾いていて、

神を見失っていたことにはっきり気づきました。彼は身をかがめてひれ伏しました。神に反すれば危うい。

バラムはモアブに到着しました。モアブのバラク王はバラムを案内して、バモト・バアルの山に連れて行きました。

山の上からは宿営しているイスラエルの民を見渡すことができます。バラムはバラクに、七つの祭壇を築き、牛と羊を献げるように求めて、神が告げられる言葉を待ちました。その結果、バラムは、イスラエルを呪うように求められていたのに、反対にイスラエルを祝福してしまったのです。



バラクとバラム

モアブの王は憤りましたが、バラムはこう答えます。

「主がわたしの口に授けること、わたしはそれだけを忠実に告げるのです。」民数記 23 : 12

バラク王は、今度はピスガの山の頂にバラムを連れて行きました。七つの祭壇を築かせ、牛と羊を献げる。そこでもまた、バラムはイスラエルを祝福してしまいました。

しかしバラク王は諦めません。どうしてもバラムにイスラエルを呪わせなくてはならないのです。バラクは第三の山、ペオルの頂にバラムを連れて行きました。

バラムはペオルの頂から顔を荒れ野に向けました。目を凝らして、イスラエルが部族ごとに宿営しているのを見渡しました。神の霊がそのとき、彼に臨みました。

彼はこの託宣を述べて言いました。

「ペオルの子バラムの言葉。目の澄んだ者の言葉。

神の仰せを聞き、全能者のお与えになる幻を見る者

倒れ伏し、目を開かれている者の言葉。」民数記 24 : 1 - 4

ここから託宣の内容が語られます。

「いかに良いことか、ヤコブよ、あなたの天幕は。イスラエルよ、あなたの住む所は。

それは広がる谷、大河の岸の園のようだ。

それは主が植えられたアロエの木のように。水のほとりの杉のようだ。

水は彼らの革袋から溢れ、種は豊かな水を得て育つ。」民数記 24 : 5 - 7

モアブの王バラクは憤りました。バラクは三度イスラエルを呪うことを求めたのに、バラムは三度イスラエルを祝福してしまったからです。

しかしバラムは次のような託宣を述べます。

「わたしには彼が見える。しかし、今はいない。

彼を仰いでいる。しかし、間近にはない。

ひとつの星がヤコブから進み出る。」24:17

はるかに遠くから、バラムは救い主を見ていたのです。「ひとつの星」というのが印象的です。救い主がお生まれになったとき、東の国の博士たちは星に導かれて遠い旅をし、ついに求める方を見出しました。

バラムが見た星をわたしたちも見つめてみたい。まだ遙かに遠く、おぼろげではあっても、やがて来られる方にわたしたちもバラムとともに思いを馳せたい。

2. ヨブ

救い主を待望した人として第二に取り上げたいのはヨブ記の主人公ヨブです。旧約聖書の中にヨブ記が含まれていることは幸いなことです。なぜなら、ヨブは、この世界、人の世の理不尽に対して、故のない苦しみの中から絶叫して神に訴えるからです。

「1 ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。2 七人の息子と三人の娘を持ち、3 羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。」ヨブ記 1:1-3

義人ヨブ、誤りなき信仰の人ヨブと呼ばれていたのに、彼は自分の子どもたちも財産も一挙に失い、体は全身ひどい皮膚病にかかり、灰の中に横たわって全身をかきむしりました。訪ねてきた三人の友人たちは、最初はヨブに同情して、言葉もなく一緒に地面に座って嘆きました。

ところがやがて友人たちは、このような不幸に見舞われたのは、何かヨブ自身に原因があるはずだと言うようになります。身に覚えのないヨブは激しく友人たちと対立し、神に対して抗議し、責められるばかりでだれからも理解されないままに、なお神に向かって叫び続けるのです。

わたしたちが理由なしに苦しみのどん底に陥るようなことがあるとすれば、そのときヨブの思いと言葉はわたしの思いと言葉となって、わたしとともにわたしのために叫んでくれるのです。

ヨブ記あらまし

物語の始まり (1~2 章)

ヨブと 3 人の友人 (3~31 章)

第 1 の論争 (3~14 章)

第 2 の論争 (15~21 章)

第 3 の論争 (22~31 章)

エリフの言葉 (32~37 章)

神の顕現とヨブ (38~42:6)

物語の結末 (42:7~)

「わたしは知っている

わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。

この皮膚が損なわれようとも

この身をもって、わたしは神を仰ぎ見るであろう。」ヨブ記 19:25-26

ヨブは自分がこんな目に遭うのは絶対に納得できないと泣き叫びながら、なお将来を捨てないのです。地上にはだれひとり自分のことを理解する者はいなくても、天にはわたしを弁護してくださる方がいる。塵のうえにのたうち回る自分のこの同じ塵の上に、必ずわたしを救う方は立たれる。この自分の皮膚が損なわれ、身は裂けて砕けようとも、なおこの肉体をもって、この目で、わたしは神を仰ぎ見るであろう。それ以外に何があり得ようか。

ヨブはもちろん、やがて来られる方、イエス・キリストを知りませんでした。しかし彼の切なる求めと確信は無駄にはなりません。ヨブ記の結末を超えて、彼を全身全霊で受けとめてくださる方が来られるのです。

彼を贖う方はやがて来られて土の塵の上に立ち、やがてはご自分の身を裂いて、土の塵の上に血を流して、ヨブを贖い、わたしたちを贖ってくださいます。

苦しみの極限からの訴えと求めにこたえて、やがてこの方はおいでになります。

3. ミカ

3番目に取り上げるのは、ユダのモレシエト出身の預言者ミカの言葉です。ミカは紀元前 700 数十年前の預言者で、世の不正や貧しい人への虐げを憤り、神の正義と公平が実現することを切望した人でした。そのミカが、より具体的に救い主を指し示してくれます。

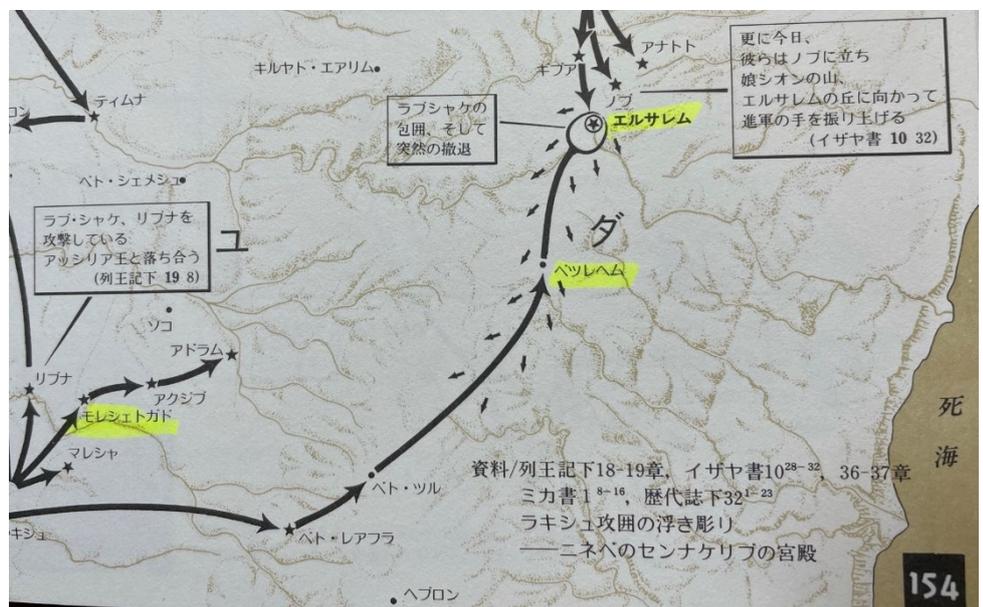
(預言)

「1 エフラタのベツレヘムよ
お前はユダの氏族の中でい
と小さき者。

お前の中から、わたしのた
めに

イスラエルを治める者が出
る。……

3 彼は立って、群れを養
う」ミカ書 5:13



ベツレヘムから出る方が、神のために、また弱り果て散り散りになった人々のために、牧者となってください。「彼は立って、群れを養う」。

この預言、神の約束に対して、地上から祈りが起こります。ミカの祈りであるとともに、救い主を待望する人々の祈りです。

（待望の祈り）

「あなたの杖をもって
御自分の民を牧してください
あなたの嗣業である羊の群れを。
彼らが豊かな牧場の森に
ただひとり守られて住み
遠い昔のように、バシャンとギレアドで
草をはむことができるように。」 7:14

神の約束が響きます。

「お前がエジプトの地を出たときのように
彼らに驚くべき業をわたしは示す。」 7:15

「主は再び我らを憐れみ
我らの咎を抑え
すべての罪を海の深みに投げ込まれる。」 7:19
神は「驚くべき業をわたしは示す」と言われます。

4. 第三イザヤ

遠い昔、ある無名の預言者はこう祈りました。

「(主よ、) どうか、天を裂いて降^{くだ}ってください。」 イザヤ 63:19

これは、主イエスよりも数百年前、イスラエルの一人の預言者が人々の嘆きを自分の嘆きとして主に訴えた祈りです。

この時代、神の民イスラエルはバビロンによって踏みにじられ、次いでペルシアによって支配されて、久しく民族としての独立を奪われたまま過ごしていました。信仰の拠り所であった神殿はバビロンの軍隊によって破壊され、荒廃したままでした。周囲の勢力に圧迫され、生活は苦しく、人々は弱り果てていました。昔神が力を現して先祖たちを救い助けられたという民族の記憶はあっても、いま人々は神の業に触れることができないままです。

イザヤ書 63 章の少し前のところではこう言われています。

「どうか、天から見下ろし、輝かしく聖なる宮から御覧ください。どこにあるのですか。あなたの熱情と力強い御業は。あなたのたぎる思いと憐れみは 抑えられていて、わたしに示されません。……あなたの聖なる民が、継ぐべき土地を持ったのはわずかの間です。間もなく敵はあなたの聖所を踏みにじりました。あなたの統治を受けられなくなってから あなたの御名で呼ばれない者となってから、わたしたちは久しい時を過ごしています。」イザヤ 63:15, 18-19

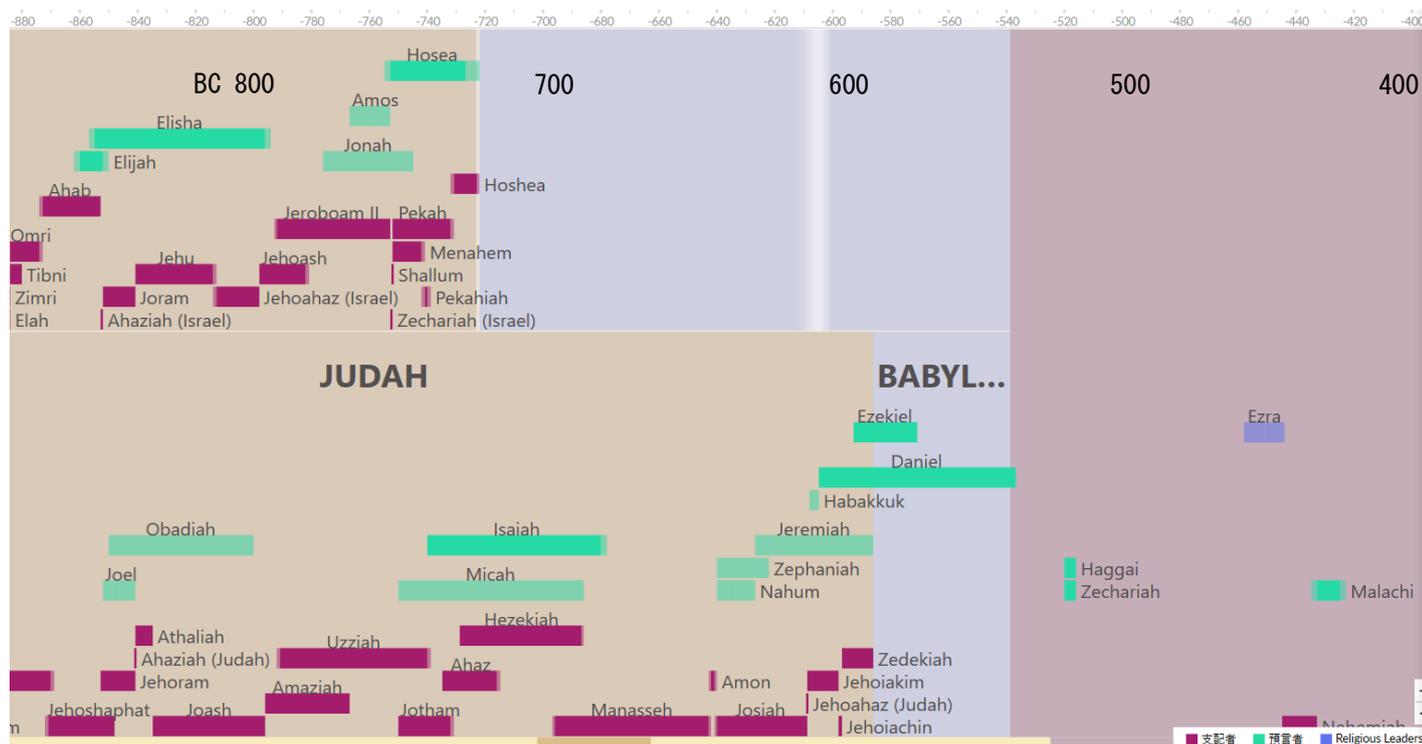
「どうか、天を裂いて降^{くだ}ってください。」イザヤ 63:19

見上げれば天は閉ざされています。主よ、あなたは沈黙を守っておられます。わたしたちは地上にいて、あなたの救いも力も知ることができません。あなたはわたしたちを見捨てられたのですか。もしあなたがわたしたちの神であるなら、どうか天を裂いて降ってください。この地上にどうかあなたご自身を現してください。

人々の嘆きとうめきが一人の預言者のうちに燃えました。それは祈りとなって神の前に注ぎ出されました。同時に、その預言者の祈りが多くの人々の魂を揺さぶりました。こうしてこの言葉は書き留められ、言い伝えられて、聖書の中に収められました。それがこの言葉です。

「どうか、天を裂いて降ってください。」

旧約聖書全体が救い主の到来を切望しています。天を裂いて神が来られるのを待っています。



聖書アプリ Accordance から

5. 降誕

このような嘆きと訴えを、神は無視されませんでした。人々が願った通りのことを、神は実行されました。人々が「天を裂いて降ってください」と訴えた通り、神は天を裂いて降られました。天から地上を御覧になるというだけではなくて、天からいっくらか手を地上に差し伸べられるというだけではなくて、実際にご自身が天を裂いて降られました。それが、神の子イエス・キリストの降誕です。神の言わば分身、神の御子イエスが、天と地の間の無限の隔たりを乗り越えて、わたしたちのところに来てくださった。主イエスの誕生は、神が天を裂いてわたしたちのところへ降ってこられた出来事です。

さらにそれは、人々が願った通り、というだけではありません。願った以上のことです。天を裂いて降られた神の子イエス・キリストは、人となってわたしたちの中に入り、わたしたちを引き受けてくださいました。わたしたちの悲惨を、わたしたちの苦しみを、わたしたちの罪と闇と死を、ご自分のものとして引き受けて受け、十字架に死んでくださいました。それは、わたしたちをもう一度決定的に神の子とするためです。

あの預言者は続けてこう祈っています。

「あなたは憤られました

わたしたちが罪を犯したからです。

しかし、あなたの御業によって

わたしたちはとこしえに救われます。」 イザヤ 64:4

預言者は自分と人々の罪を知っています。当然のように神に救いを要求する資格があるとは思っていません。けれどもなお、「**あなたの御業によって、わたしたちはとこしえに救われます**」と信じて嘆願するのです。

「あなたの御業」、神の救いの業、イエス・キリストの降誕は、このわたしたちのために、このわたしのために必要だった。その必要なことを神は天を裂いて行い、さらに神の御子は十字架の上でご自身を裂いて実現してくださったのです。

「この憐れみによって、

高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、

暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、

我らの歩みを平和の道に導く。」 ルカ 1:78-79

降誕の出来事に支えられて、わたしたちは前方を見ます。わたしたちの将来——イエス・キリストの二度目の到来、再び天を裂いて来られる日に目を向けて、姿勢を正します。希望をもって前方を見つめ、善いことをしながらその日に備えます。